



はじめに

ベテラン教師の大量離職により、新規採用者が年々増加しています。教師を目指す若い人にとっては、チャンス到来の時代がやってきたと言えるでしょう。

ところが、希望がない、教壇に立つことができたにもかかわらず、自ら教職を離れていく若い人が、年々増加していることが、文部科学省の調査で明らかになりました。大量採用の時代ですから、離職する人が増えるのも当然なのかもしれません。しかし、生涯をかけて教師として歩みたいと夢見て教職についたにもかかわらず、わずか1～2年足らずで、その夢をあきらめざるを得ない状況になってしまった人が、かなりな数にのぼると考えられます。

子どもの指導や保護者への対応が難しくなり、調査や報告書類の増加によって、教師の仕事は、多忙を極めるようになりました。世間の学校に対する要望が厳しくなり、経験年数に関係なく、どの教師にも、高い学級経営力や授業力が求められるようになりました。大量離職の時代を迎え、若い教師を指導したり、相談にのってくれたりするベテラン教師が減ってきたことも、若い教師を苦しめる原因になっていると考えられます。

こうしてみると、若い教師にとっては、「受難の時代」のようにも思われますが、視点を変えれば、厳しい環境の中、ベテランも少ないので、早い時期から学校の重要な仕事に携わることができます。中心となって学校を動かすことができる立場になります。ひと昔前の若い教師とは異なり、今の若い教師は、さまざまな面で周囲から期待されているのです。加えて、同



じ世代の仲間も大勢いて、学校経営や授業、学校運営について、相談し合い、互いに切磋琢磨しながら力量を上げることも可能になります。

これからは、若い教師にとって、まさに「チャンスの時代」と言えるのです。このチャンスを生かすためには、もちろん教師に必要な仕事術を身につけていく努力が必要です。そして何より、教師として人生を歩む気概をもつことが必要です。この、教師として必要な基礎は、新任から3年でかたちづくられると言っても過言ではありません。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったものです。教師になって最初の3年間をどのように過ごすかで、その後の教師人生が大きく変わります。

教師は素晴らしい仕事です。未来を創る子どもたちを育てるという、とてつもなく大きな夢のある仕事です。教師の仕事に誇りをもち、充実した教師人生を歩むための一助として、本書を活用していただければ光栄です。

2014年秋

中嶋郁雄

contents

はじめに	3
Introduction ——すてきな教師人生を歩むあなたへ	9

Chapter 1 牽引術

● 担任とは学級のリーダーである！	16
① 新任1年目でも教師は教師	18
② 子どもの前で年齢や経験は関係ない	20
③ 教師の影響力の大きさを意識する	22
④ 目指すは「好かれる」ではなく「信頼される」	24
⑤ 徹底すべきは「あいさつ」「返事」「言葉づかい」	26
⑥ 教える者と教わる者の明確化	28
⑦ 若い時こそ子どもと距離をとる	30
⑧ 迷いや失敗をとことん生かす	32
⑨ 教師だからこそ「師」をもつ	34
⑩ 充実した教師の姿が子どもの成長を引き出す	36
◎ column1 ◎教師の姿勢を教えてくれた鬼教頭	38

Chapter 2 経営術

● バランスを大切にした指導で 子ども同士をつなげる！	40
① 学級びらきは担任主導と速攻性	42

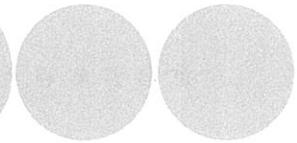
contents

②学級ルールの最終決定責任者は担任	44
③子どものチャンスを平等に保障する	46
④「あの子はこんな子……」が間違いの始まりに	48
⑤「根本」こそを大切に	50
⑥「迎えにいく」話術をみがく	52
⑦あえて子どもに「失敗」をさせる	54
⑧休み時間は子どもとの時間	56
⑨学級通信と保護者会の工夫が効果を上げる	58
⑩学校すべての子どもに目を配る	60
◎ column2 ◎今も誇りに思うこと	62

Chapter 3 授業術

●学力を伸ばし、 学びの充実感を保障する授業者に！ 64

①教材研究はとことん	66
②あなどるなけれ、指導案	68
③さまざまな授業形態を効果的に使う	70
④「強制」が授業の基本であることを理解する	72
⑤優れた授業こそ「学習のきまり」が徹底	74
⑥学習進度を徹底チェック	76
⑦学ぶのは子ども	78
⑧緊張と弛緩で学習効果アップ	80
⑨スキルアップは「ねらい」を中心に	82



⑩先輩に授業を見てもらい、見せてもらう 84

◎ column3 ◎「誰のためにやっているの？」 86

Chapter 4 ダンドリ術

●できる教師は時間使いのエキスパート！ 88

①まずは1年間の仕事を把握する 90

②職場に着いたら、すぐ仕事 92

③仕事の少量化はデータの再利用で 94

④「遮断する力」の威力 96

⑤「余裕」の計画を 98

⑥「子どもが動く」学級づくりが教師を助ける 100

⑦説明・指示の無駄を省く 102

⑧欠席した子がいても授業が遅れないコツ 104

⑨ノートチェックや採点は「すきま時間」がカギ 106

⑩オンとオフの切り替え上手に 108

◎ column4 ◎仕事のやり方の根本を考えるきっかけになった出来事 110

Chapter 5 関係術

●トラブルは一人で抱え込まなくていい！ 112

①職員室は人材の宝庫 114

②チーム力を使ってこそその学校教育 116

contents

③職場の雰囲気づくりの核になる.....	118
④誠実さが人間関係の基礎.....	120
⑤「担任理解」に力を尽くす.....	122
⑥「教えてください！」で伸びる教師に.....	124
⑦スキルアップは他者との融合あってこそ.....	126
⑧研究サークルをつくろう.....	128
⑨社会の変化や動きに目を配る.....	130
⑩時間がなくても読書に励む.....	132
◎ column5 ◎チームの大切さに気付いた瞬間.....	134

Chapter 6 対応術

●保護者は教師の最強パートナー！	136
①トラブルは起こって当然.....	138
②「予兆」をとらえる.....	140
③先手必勝で事態好転.....	142
④子どものケンカは両成敗.....	144
⑤前任者からの情報収集は必須.....	146
⑥保護者との連携が子どもを守る.....	148
⑦クレーム対応は労を惜しまず.....	150
⑧難しい保護者の対応は学校組織力で.....	152
⑨勤務校の危機管理体制を熟知しておく.....	154
⑩マスコミの報道は冷静に受け止める.....	156
◎ column6 ◎受け入れることこそが最大の防御.....	158

Introduction

すてきな教師人生を 歩むあなたへ



●…………確かな教育観に根ざした教育を

かつて教師の仕事は、「聖職」と言っていた時代がありました。

地域の人々に尊敬の眼差しで迎え入れられ、人々から「先生」と慕われました。未来ある子どもを立派な人間に導き育てる者としての責任感に満ちて、人を教え導く者として、常に自ら学び、自分を律し、誠実に振る舞い、教職に誇りをもって教壇に立っていました。

本来、教師とは、誇り高い仕事であり、社会に対して相応の責任を負う仕事です。困難は大きくとも、それを凌駕する充実感を得ることができます。それが教師という仕事です。

教師は、人が人生の中でもっとも多感で著しく成長を遂げる子ども時代に関わり、人として大切なことを教え導いていきます。

教師が身につけてきた人生観や価値観は、教育観と密接に結びついています。子どもと接するあらゆる場面で、教師の価値観や教育観が、子どもへの指導にあらわれます。

子どもは純粋で素直です。「三つ子の魂百まで」と言われますが、幼い子どもの頃に刻み込まれた習慣や価値観は、その後の人生に大きく影響します。教師の指導が、子どもの人格形成に大きく影響をあたえるのです。教師は、未来ある子どもを教え育てるという畏れ多い仕事をしているのです。ですから、

「人を教える者として、どのように生きるべきか」といった根本まで突き詰めて考えなくてはなりません。日々の真剣な実践と努力によって形成された教育観と教育信念に基づいて指導に当たることが、子どもの人格形成に大きく影響をあたえる者としての責任です。

子どもの価値観の形成・人格形成に大きな影響をあたえる畏れ多い仕事だからこそ、豊かな人生観と確かな教育観を身につけて、高い志をもって子どもの指導に当たらなくてはなりません。信念を貫いて子どもに接すれば、どんなに些細な言動も見逃さずに指導することができます。多少の批判やクレームさえも、自身の信念が試される貴重な場として受け入れることができます。

「教師とは何か」「教育とは何か」……常に考えながら、子どもの指導に当たるようにしましょう。教室で行われる教育は、教師であるあなたの強い信念を核にして進められるものなのですから。

●…………何事も前向きに考える教師で

何をするにもいつもニコニコ笑って生活をおくっている教師が

います。人が避けるような仕事を進んで引き受け、「つらいだろくな」と思うことも、平気な顔をしてやり遂げてしまいます。そのような人は、子どもから人気があり、保護者の信頼も篤く、同僚からも好かれています。

反対に、何に対しても不平を口にし、暗い顔で教師生活をおくる人がいます。嫌な仕事から逃れ、負担のかかることは一切やろうとしません。そのような人は、子どもや保護者の信頼を得るどころか、小さなことに喜びを見出したり、心から楽しいと思うことに出会うことはないでしょう。

同じ教師でありながら、両者の違いは、いったいどこからきているのでしょうか。それは、「**心もち**」が異なるということです。

人は、心もちひとつで、幸せにもなれば不幸にもなります。同じものを食べても、「なんて美味しい！　ありがたい」と感じるか、「もっと美味しいものはないの？」と感じるかの違いです。どちらが幸せで、将来伸びる人なのかは、言わずもがなです。

些細なことに感動し、教えを素直に受け入れ、感謝の気持ちをもつことのできる人は、前向きな人です。さまざまのことチャレンジして、常に努力を続けることのできる人です。こういった人は、間違いなく、充実した教師人生を送ることでしょう。

子どもにしても、毎日目標をもって生き生きと充実した生活をおくっている教師に教えてほしいはずです。ドイツの教育学者、ディースターヴェークの言葉に、

「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」
という名言がありますが、自分の人生にとっても、目の前の子どもたちのためにも、前向きに学び続ける教師であり続けたいものです。

経験や年齢に関わらず、子どもたちの前に立った瞬間から、教師は子どもを指導する立場におかれます。担任になれば、クラスを統率し、自信をもって牽引しなければなりません。

担任としてクラスを任せられた瞬間から、教師はクラスのリーダーとしての自覚をもって、子どもの前に立たなくてはなりません。学級を統率し、子どもを指導するためには、担任のリーダーシップが必要不可欠です。確かな力量をもった担任というリーダーの下でこそ、学級はより質の高い集団として機能し、子どもたちは個々の力を十二分に発揮しながら成長することができます。

若く経験が少ないうちは、自信がもてず、子どもの前に立つだけでも不安になってしまふかもしれません。しかし、それはこちら側の事情であって、子どもにとってはまったく関係のないことです。ベテラン教師も若手教師も、どちらも同じ担任なのですから。むしろ、若手にはベテランにはない活力とパワーがあります。また、子どもに近い感覚で物事をとらえることもできます。教師として子どもの前に立つことを認められ、担任として一つの学級を任せたことに自信をもちましょう。

「私は、あなた方の担任だよ。リーダーの私についてきなさい！」

そう胸を張って堂々と子どもの前に立てばいいのです。その自信が威厳を生み、頼りにされる存在に映り、子どもや保護者の信頼へとつながるのです。

ただし、忘れてならないのが、授業論や生徒指導の技術、教育観や児童理解など、教育のプロとして必要な力量・技術を身につけなくてはならないということ。ドイツの教育学者、ディースターヴェークは、

「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」

と言っています。子どもに学びと成長を望むのであれば、まずは教師が率先してその姿を見せるべきです。それがリーダーの義務であり、自ら率先して努力する姿勢を貫いてこそ、子どもや保護者の信頼を得ることになり、教師を続けていく上での自信にもなります。



残念な状況



*自信なく子どもの前に立つと、リーダーとしての資質が疑われる。



目指すべき姿



*安心感をあたえることで、リーダーとして迎え入れられる。